

寒いのに 温かい街

ポーランド広報文化センター所長 ミロスワフ・ブワシチャック

ポーランド広報文化センターは、ポーランド文化のプロモーションを使命としていますが、特に北海道におけるポーランド文化遺産の普及に重点を置いています。私たちの国を北海道民、特に札幌市民に近づけるうえで大きな役割を果たしているのが、北海道ポーランド文化協会と、北海道大学の教職員、学生を中心としたポーランド人社会です。

昨年は当センターと、貴協会ならびに札幌のポーランド人社会との協力が大きな実を結び、私たちはそれをとてうれしく思っています。具体的には、北海道大学祭におけるポーランド料理模擬店、第4回札幌ポーランド文学朗読会「午後のポエジア」、東京特別例会「樺太時代に生きたポーランド人」(以上6月)と、札幌エルプラザで開催された「ヤン・カルスキ」展(10-11月)です。

今回の札幌滞在の間に、貴協会の安藤厚会長とラファウ・ジェプカ博士にお目にかかり、私たちの今後の協力について話し合うことができました。

2月7日には札幌ポーランド映画祭で、とても優れたポーランド映画2本(クラウゼ監督『借金』とパヴリコフスキ監督『イーダ』)を観ることができました。

第66回さっぽろ雪まつりに参加しているポーランド代表を見ることができたのも大きな喜びでした。第42回国際雪像コンクールにポーランド・チームが参加し、彼らの作品「TOUCH-AND-GO」は第4位に輝き、チームのメンバーは雪まつりを訪れた人々からとても好意的に迎えられました。

国際雪像コンクールで初の4位入賞

今年もさっぽろ雪まつりにあわせて開催された国際雪像コンクールには、全部で12カ国、ヨーロッパからはポーランド、フィンランド、イタリアの3カ国が参加しました。ポーランドの参加は3度目で、昨年ドルヌイ・シロンクス県(県都ヴロツワフ)から参加した女性チーム「シュルラルスカ・ポレンバ」につづき、今年はシロンクス県からカトヴィツェ美術大学の教授や若手彫刻家など当代ポーランド美術界を代表する有力者を送り込んできて、強い意気込みが感じられました。リーダーのトマシュ・コツレンガ教授は力強い作風の彫刻家として知られています。

今年の作品は「Touch-And-Go」というテーマで、他国の娯楽的な作風とは趣を異にしています。雪像の制作中は好天に恵まれましたが、最後の夜に暖かい雨



ポーランド映画祭で挨拶するブワシチャック所長と司会の小倉聖子さん(マーメイドフィルム/ポーランド広報文化センター)

ポーランド広報文化センターが上記映画祭とポーランドの「雪の彫刻家」来日の実現に寄与できたことをうれしく思います。

もうひとつうれしかったのは、雪まつりで、とても大勢のポーランド人とお会いできたことです。誰もが口々に、札幌の人々はとても客好きであると語り、みなさまの故郷の到る所で歓迎を受けた実例を話してくれました。おかげさまで、雪まつりの最終日は雨模様だったにもかかわらず、ポーランド人——私もその一人です——の気分はいささかも損なわれなかったのです……。



ポーランドの雪像「Touch-And-Go」



(左より) プワシチャック所長、コツレンガ教授
とポーランド雪像チーム

と強風で完成した像の大半が溶けるアクシデントがあり、出来上りを多くの人々に見てもらえず残念でした。

審査の結果、優勝はタイの「三輪タクシートゥクトゥク」、準優勝はフィンランドの「憧れ」と決まり、ポーランドの「Touch-And-Go」は像が溶けてしまったこともあり4位でしたが、3度目で初の入賞を果たしました。今後も参加をつづけるそうですので、さらに好成績が期待されます。(文・写真:尾形 芳秀)

《ポーランド映画祭 in 札幌》がやってきた。

さっぽろ雪まつり3日目の土曜日、札幌プラザ2・5で《ポーランド映画祭 in 札幌》に参加した。昨年11月と12月に東京・渋谷シアター・イメージフォーラムと京都・同志社大学で上映された一連の映画祭作品のなかから2作品を選んだ上映会で、このたび当協会は協力団体として参加した。札幌での複数のポーランド作品の上映会はこれで4回目となる。

今回上映された一作目は、昨年12月24日に61歳で永眠されたクシシュトフ・クラウゼ監督の傑作『借金』(1999)。実際の事件をもとに、マフィアに脅されありもしない借金を背負わされた2人の男の悲劇をドラマチックに描いている。

これまでクラウゼ監督作品は、当協会の例会で2度見る機会があった。実在した画家の伝記『ニキフォル 知られざる天才画家の肖像』(2004)は2010年の《ポーランド・in・北海道》で、薄氷の上の危うい幸福を描いた『救世主広場』(2006)は2011年の《ポーランド現代映画セレクション2004-2009》で上映された。また、遺作となった最新作『パパーシャの黒い瞳』※は東京・岩波ホール(4/4~5/22)、札幌・シアターキノ(7/11~)など全国で上映される。

※ 書き文字を持たないジプシーの一族に生まれながら、幼い頃から言葉や文字にひかれ、詩を詠んだ少女プロニスワヴァ・ヴァイス(愛称パパーシャ)。激動のポーランド現代史に重なる実在した女性詩人の生涯が描かれる。(ヨアンナ・コス=クラウゼ監督&クシシュトフ・クラウゼ監督)

もう一作はパヴェウ・パヴリコフスキ監督『イーダ』。こんな完璧な映画はかつてあっただろうか。極度に静かな白黒映像によって悪と罪が幾重にも折り重なったポーランドの灰色の歴史と、苛酷な過去を抱えたポーランド社会の人々をそのまま捉えた。静謐な映像美に浸りつつ群を抜いた名作と実感。大きな目が印象的な、寡黙な少女イーダのロードムービー仕立てだが、少女は外の世界を経験したことがないだけに、白紙のように美しく、純真である。

「近年で最も優れたヨーロッパ映画の一本、そしてヨーロッパとその過去・現在についての最もオリジナルな一本を撮った」A・O・スコットはポータルサイト Polska.pl にこう語った。第87回アカデミー賞「外国語映画賞」最有力作品とされていたが、2月23日その受賞が現実となった！(氏間 多伊子 うじま・たいこ)



『イーダ』の一場面



プワシチャック所長と筆者